

『とりかへばや』諸本分類考・補遺

——「森本」補筆本文の詳細——

新居和美

はじめに

本稿は、拙稿「『とりかへばや』諸本分類考——「改作本系統」の位置付けについて——」（『中古文学』第78号 平18・12）において、紙面の都合上、割愛せざるを得なかつた箇所の補足にあたる。

先の稿では、『とりかへばや』諸本を四分類として捉える従来の諸本分類にさらに一系統を加えるべき考えを述べた。従来の諸本分類は、比較的古態を有するとされる第一種と第二種、山岡俊明の校訂があるとしてされる第三種、上記いずれにも属さない第四種の四分類であり、その四系統間には数文字程度の小異同しか存しないとされてきた。しかし、諸本を検討すると、十文字以上の異文を多数有する写本が複数存在することが判明したため、拙稿ではそれらを新たに異本系統として位置付けた。さて、その異本系統はさらに二種に下位分類できる。すなわち極めて多くの異文を有する筑波本・天理本の一グループとそれよりは少なくなるものの異文を有する静嘉堂本

（伊藤光中校合本）イ本本文のグループである。静嘉堂本（以下、光中校合本と称す）は複数の写本を用いて校合が行われており、その校合本の内、「イ本」と「森本」が異本系統にあたる。しかし「森本」に関してはその本文の一部のみが異本系統にあたることから、諸本分類に組み込むことはできず、その詳細も記すことができなかつた。よつて本稿では「森本」の詳細を紹介したいと考えるものである。

一 「森本」の所在

まず、光中校合本奥書における「森本」の情報を確認しておこう。

文政十二_己丑年二月以森嘉基校本對校畢

森本奥書

右とりかへばやの物語四巻は蓬萊氏の本をかりて写しとり校合もをへぬ 天明五年乙巳正月十日 本居宣長

右鈴屋大人の御本もてうつしぬ

加藤磯足

文政三年十二月校合畢傍注もいさゝか書加ふ

酔月園嘉基

文政四年正月廿日校合をへぬ

千無羅仲雄

かくあれと校合書入は嘉基自筆と見ゆ（以上、朱）

上記から、光中が文政十二年（1829）に校合に用いた「森本」すなわち光中がいうところの森嘉基校本は本居宣長から千村仲雄までの奥書を有する写本であることがわかる。この「森本」は、現在、刈谷市中央図書館村上文庫に所蔵される一本と思しい²。奥書を掲げる。

右とりかへはやの物語四巻は蓬萊氏の本をかりて寫しとり校合も
をへぬ 天明五年乙巳正月十日 本居宣長

右鈴屋大人の御本をもてうつしぬ 加藤磯足

文政三年十二月校合畢傍注もいさゝか書加ふ 酔月園嘉基

文政四年正月廿日校合をへぬ 千無羅仲雄 ↑付箋

天保七年七月會津家士佐藤甚右衛門の蔵本を以て校合を
へぬ一本云々と傍二書入カケ札ニモセシハ此時ノ校合ノ
一本ナリ 和布麿(花押) ↑付箋

天保十三年五月廿五日於東武市谷左内羈宿一覽畢 菊麯舍仲敏
(墨文字は明朝体で、朱文字部分はゴシック体で記す。)

本居宣長から千村仲雄までの奥書が光中校合本の奥書と一致する。
さらに、光中校合本にある「森本」の校合跡と村上文庫本本文が一
致することから、光中が用いた写本は村上文庫本か、それを忠実に
書写した写本であると思しい。また両者の奥書から、どうやら光中
校合本は千村仲雄までの奥書のある時点での「森本」を校合に用い
たようである。現在の「森本」は、本文が一面十二行で書かれてい
る部分と一面十一行で書かれている部分とがあり、両者は筆跡が異
なる。さらに前者には加藤磯足・千村仲雄・和布麿などの複数の手
になる注記が施されているのに対し、後者は和布麿の注記しか存在

しない。よって、元々は一面十二行本であったものが、いつの時期
かに本文の一部が欠け、そこが他本によつて補われた結果、その部
分のみが一面十一行になったと推測できる。

さて、その欠脱・補筆が行われた時期はある程度限定できる。ま
ず、先に述べた「森本」の注記の状態から、文政四年(1821)正月二
十日(千村仲雄の校合年次)から天保七年(1836)七月(和布麿の校
合・加注年次)までの間にそれが行われたとわかる。また光中校合
本にある「森本」の校合跡は現在の村上文庫本と一致するため、光
中が校合に用いた段階で欠脱・補筆は行われていたと思しい。よつ
て光中が「森本」を校合に用いた文政十二年(1831)二月を下限と考
えることができ、欠脱・補筆時期は文政四年(1821)正月二十日以降
文政十二年(1831)二月までの間と推測できるのである。

二 「森本」の補筆本文

「森本」における後に補われた本文部分こそは、先に述べた異本
系統に属するものである。補筆本文は巻三と四に存在する。その詳
細を示せば次の通り。

上巻(巻一と二を含む) 一巻一：44丁 巻二：23丁

中巻(巻三) 一52丁(うち14丁と20丁と41丁と52丁の合計19丁分

が補筆部分)

下巻(巻四) 一48丁(うち38丁と46丁までの9丁分が補筆部分)

全体：167丁(うち28丁分が補筆部分)

補われた28丁分の本文中に145例の独自異文³が存在する。先に述べた異本系統の二つのグループが有する独自異文との一致数をみると、筑波本のグループとは148例中、127例一致し、静嘉堂イ本本文とは148例中、70例一致する。数値から考えると、筑波本グループにより近いと考えられようか。しかし、両グループと一致しない独自異文も存在する。これらは欠脱を補う際に用いられた写本を判別する目安になると思われるので、数例、紹介しておく。いずれも巻四末尾にある独自異文である。

- ① かたらひ給ふほどに此はらにもいとうつくしき姫きみ(四五ウ)
② 太政大臣になり給ひていし御心もの定めらるるによりて大將どの(四六才)

網掛け部分が独自異文である。①は男君と麗景殿女御の妹の間に子があることを記述する条で「此はらにも」が付け加えられており、②は右大臣が太政大臣に昇進した条においてその様子が附加されている。他にも「森本」のみが有する独自異文は存在するが、他は一、二文字程度の異文であるため、右の二例がひとまずわかりやすい目安となる。

おわりに

本稿では「森本」の補筆本文を紹介したが、残念ながら、本文を補う際に用いられた写本の特定ができない限り明確な位置付けはしがたい。また、先稿で注目した「イ本」にしろ、本稿の「森本」に

しろ、それが校合本文である以上、通常の写本本文と同等に取り扱うことはできず、注意が必要であろう。しかしながら、吉田幸一氏が南三木氏旧蔵本の朱書校異本文を用いて乙類を立て、後に同系の小野本等の出現があつたように、たとえ校異本文であろうともその性格が知られていれば、後の研究に益することもあろうかと思う。このような考えにより本稿では「森本」の補筆本文を紹介した。異本系統の全容や派生の経緯などを明らかにするためには、未だその性格が知られていない諸本の一本一本に当たって確認していくしかない。解明には今しばらくの時間を要しよう。その過程において本稿がわずかばかりでも役に立てば幸いである。

〔注〕

- (1) 四卷四冊。一面十行本。表紙藍色、紙表紙、本文楷紙。袋綴。二七・五×一八・五cm。(登録番号 五一四函四架二二五三號)
(2) 写本三冊。表紙縹色、紙表紙、本文楷紙。袋綴。二六・八×一九・二cm。(登録番号 和大1043)
(3) ここでいう独自異文とは現在現在本文全体が紹介されている『とりかへばや』写本にはない異文をさす。今回は精密なデータを計上するために、現在本文全体が紹介されている『とりかへばや』との比較を行った。
(4) 吉田幸一氏『とりかへばや上』(昭36 古典文庫)。

《付表》「森本」補筆本文の独自異文一覽

〔凡例〕

- 一、本表は、刈谷市中央図書館村上文庫本（和大1043）の補筆本文における独自異文を示したものである。
- 二、上段には独自異文とその所在を示し、下段には『新編日本古典文学全集 とりかへばや』(平14 小学館)における所在を示した。
- 三、本文における網掛けは独自異文であることを示す。

○卷三（14丁〜20丁）

本文	新全集
ものぐるほしく殿におほしいはんも（一四オ）	342・5
いと男べかしうのたまふに（一四ウ）	342・11
いかなる御心がはりぞ（一四ウ）	342・12
御身にいつらをいづく（一四ウ）	342・14
大かたはひらきのみして（一四ウ）	343・1
いかなるべきにかとかくおほしやるも（一五オ）	343・9
侍らじたらあるがほにて（一五オ）	343・13
見奉らぬものとなりたれば（一五オ）	344・4
たゞこれも有べき事なればいかにと（一五ウ）	344・10
御聲をだにうけ給はる事時なく（一五ウ）	344・13
ありつき給はうせ給ひにし大将に（一六オ）	345・3
ひとつたがふ所なく女さまにて（一六オ）	345・4
うつしたりとおもひしをおなじさまに（一六オ）	345・5
このさために大将にて（一六オ）	345・9
あやうげになりまさら侍れば（一六ウ）	346・6
まあり禰らんことおもいつとなく（一六ウ）	346・7

いぶせき雲などかきつくして（一六ウ）
 うちさうぞまゝ出給ふを見奉る（一七オ）
 見奉るかぎりの人浅ましく涙の涙の涙おなじや
 うにもてなしたれば（一七オ）

しる人もな此男君かく出立て（一七オ）
 おほえぬまゝに此めのと子（一七オ）

めのと子の親大將どのは（一七オ）
 ひたひ髪のごぼれたるかゝりなど（一八オ）
 うつくしきかたち見まほしき（一八オ）

やうく近く物かげよりぞと見るにげに（一八オ）
 げにねたげなるまほほ見しやうなる人かな（一八オ）
 心まどひして猶見れば（一八オ）

かほやうのはなやかさ（一八オ）
 女さまにだにあらばふと（一八オ）
 うきたるげによりて人にとがめられぬ（一八ウ）

かぎりなく遠よりになまめきたる（一八ウ）
 内侍のかんの君のかきりとおほし（一九オ）
 まほにはあらずうち透ば見給へりし（一九オ）

めでたしと見奉御げ人のおほしけるよ（一九オ）
 大将にこそおはすれいでやかくて（一九オ）
 ゆふ風吹出ぬれすゆるこんち（一九ウ）

泣まどひひてよろづにあつかひ（四一オ）
 御せうそごだになきをさうしつらし（四一オ）
 すみなれし山のかゝをいくらばかり（四一ウ）

引ぐせんにも所せ此世のほかに（四一ウ）
 おなじふもとへだてぬ御すまひならず（四一ウ）
 掃りいらんも御はづかしきと（四一ウ）

346・7
347・4
347・4
347・6
347・8
347・8
348・14
348・14
348・15
349・1
349・1
349・1
349・3
349・3
349・4
349・5
349・7
349・7
349・14
350・4
350・5
350・5
350・9
350・12
351・9

397・2
397・10
398・3
398・3
398・5
398・6
398・6
398・10

たとおほせかしこむながらもと(四二才)	398・15
御なげきばかりこそかはる事なかりけれ(四二才)	399・15
さぶらひ給ひしもうつともおほえず(四二才)	400・5
しづ心なきごとはりなりや(四二才)	400・6
おのくの御心たがひなく(四三才)	400・8
論じあがふ人ほよもあらじ(四三才)	400・14
あつかひまどひける おととも(四三才)	400・15
かんの君はむねうちつづがれをせ給ひけり(四三才)	401・2
今の大将の御心 いみしくぞ(四三才)	401・8
哀なりける 右のおととの(四三才)	401・9
我心も まばゆくおほゆ(四三才)	401・12
此みこの御むすめ見えきこえ給ひて(四四才)	401・15
かぎりなくおほしよるこぼせ給ひて(四四才)	402・9
とばかり御らんするに久しかりつる(四四才)	403・2
うちまもらせ給ひて御涙をさへ(四四才)	403・5
光りも見へすたとりありつと(四四才)	403・7
そひにけり 目もあやに(四五才)	403・12
きこえ給へなどいふにむねつづれて(四五才)	404・4
御まへのかたのみとはかり見やどられて(四五才)	404・8
右のおほいどのと君の有さまさうらいと(四五才)	405・4
その中におはしまして みまほしければ(四六才)	405・9
めならへはわすれやしろしたれゆへに(四六才)	405・13
ときこえ給ひける此のには(四六才)	405・15
世を はなると御心のありけるかと(四六才)	406・4
まぐばかりいみじき事はなし(四六才)	406・8
思ひはなれ給へほかにまかすべくもあらず(四六才)	406・13
しの空のもりのゆかりを(四七才)	407・6
いぶせく哀におぼす又よし壁山を(四七才)	407・8
あれとてみづから立居しつらひ(四七才)	407・12

女房引つくるひなどし給ふ女君いと(四七才)	407・12
かたはらいたく遠くくるしきに(四七才)	408・5
おとといと心もなじおほして(四八才)	408・15
めにあひ見るべきものともおぼえず(四八才)	409・2
うつともおほほへすうち泣ぬるけはひ(四八才)	409・4
身のごとはりも思ひ(四八才)	409・7
いみしからむつみの残りあるべくも(四八才)	410・7
浅からぬ心むしななりや(四九才)	411・3
夜をうちとけて猶うらみがほにて(四九才)	411・4
まごとのをこはさまことなるにや(四九才)	411・8
あやしとのみおほすにつけて猶あやしく(四九才)	411・9
有しそれにもあらじ(四九才)	411・15
とぞ思ふ(四九才)	411・15
中納言ははかなく(四九才)	412・3
日頃もすぎ月のかさなるまに(四九才)	412・3
よるひるよとむ時なきなみだくれなぬに(五十才)	412・10
心まどひぞまたものに似てさは世に(五十才)	412・14
いのちはかたなるこゝ地する(五十才)	412・15
いかならんにて思ひしらむむ(五十才)	413・4
ちんにことのだめあるにはかならず(五十才)	413・8
あつなくおほしなりけん(五十才)	413・12
さる人ありともいかに成にけん(五一才)	414・7
さる人ありともいかに成にけん(五一才)	414・7
さる人ありともいかに成にけん(五一才)	414・7
さまへうき思ふるかたなく(五一才)	414・14
御事をあまづきやうに(五一才)	415・8
人に見せまじきかせじと(五一才)	415・8
いとほしけれといとあゑかにわりなく(五一才)	415・11
猶ありがたしとばかりうち見て(五一才)	416・1

○巻四(38丁~46丁)

はじめよりの事もきこえんとたまへば(三八オ)	507・12
たが御ためもいかに(三八ウ)	508・7
めづらしきあやしかるべき(三八ウ)	508・7
よろづにきこえおこたり給へど(三八ウ)	508・10
たえはて給ひける野中の清水は(三八ウ)	508・12
人をつらしと思ひ入しにや(三九ウ)	509・11
哀におぼゆかりけるこれもききの世のむくひにやとおぼししり れさせ給ふ(三九ウ)	509・15
四の君の御はらに男の子三人(三九ウ)	510・2
大殿にあづけおひ出給ひし(三九ウ)	510・3
此若君をぞ御子になしきこえて(三九ウ)	510・6
せんじなどはいと悲しと見奉りて(三九ウ)	510・8
物つまじきあかなる御心なれど(四十オ)	510・12
姫君ふたり若君ひとり生れ(四十オ)	510・15
生れ給へり(四十オ)	511・1
おと姫君は大将のうゝ(四十オ)	511・1
若君とひだりみぎに(四十オ)	511・2
ひだりみぎにぞ(四十オ)	511・2
大納言のしれぬ 若君も(四十オ)	511・3
大将殿の若君おなしやかにて(四十ウ)	511・5
しのびやかに出にし宵の事(四十ウ)	512・1
いと悲しければほろくを泣れけれとあやしとや(四一オ)	512・2
あやしとや思はれんと(四一オ)	512・3
おほしてもてかくし給へど(四一オ)	512・3
御涙はひたふるにこぼれて(四一ウ)	512・3
哀とおぼしてのたまふるはめここれや(四一オ)	512・10
まめだちてつものもえのたまはめを(四一ウ)	512・14

しのびで見きこえ(四二オ)	513・8
きこえさせんとかたらひ給へば(四二オ)	513・9
髪はまきほくにゆるくと(四二オ)	513・14
おぼしわたりつるを空御らんじ(四二ウ)	515・1
さだめかりけるこころをそごもおかし(四三ウ)	516・2
なまめかしささばかり有ぞあらんかし(四三ウ)	516・11
いかでかざる事の侍らん恋と(四四オ)	517・3
人々いふなりかじげにさまで(四四オ)	517・5
殿にはかたくな申そとありつれば申まじ(四四ウ)	518・4
寐てもさめても恋悲しとおぼし奉り給ふに(四五オ)	518・14
かたらひ給ふほどに此はだに泣いとつくしき姫きみ(四五ウ)	519・11
四の君はじめの姫君たち密(四五ウ)	519・12
はなちてはまた姫君もものし給はねば(四五ウ)	519・12
れいけい殿の女君だに(四五ウ)	519・14
此君のかくうつくしうて出給へれば(四五ウ)	519・15
きどゆいみし(四五ウ)	519・15
悲しうし奉り給ひてつどもえはなちきこえ給はねば(四六オ)	520・1
給はねば大将もいとよしと(四六オ)	520・2
いとよしとおぼしておぼるお世給ひに女御の御事を(四六オ)	520・2
何事ももてかくされ給ひける(四六オ)	520・6
太政大臣になり給ひていと御心もどめらるるまによめて大 将どの左大臣(四六ウ)	520・9
みかどもおぼろおさせ給ひ(四六ウ)	520・12
東宮ぞ御(四六ウ)	520・13

〔付記〕資料の閲覧をご許可下さった諸機関とその関係者の方々に記して
厚く御礼申し上げます。
—— あらい・かずみ、広島大学大学院博士課程後期在学